

十六世紀の人文主義哲学者として知られているエラスムスの著書『痴愚神礼讃』は、人間だれもが持っている愚かさには痴愚神の名を与えて、狂気の中にある世相を諷刺して語らせているが、その中に子どものことを記している個処がある。

「私たちが幼児をかわいがり、接吻してやったり愛撫してやったりするのも、仇敵でも幼児ならば助けてやったりするのも、幼児たちのなかに痴愚女神の魅力が備わっているためではないでしょうかしら？ 注意深い自然は、生れたての嬰兒にこういう魅力を与えて、嬰兒を育てる人々の苦勞を樂しきでつぐなえるようにし、おとなたちの保護をまんと手に入られるようにしているのです。」(世界の名著、第17巻 中央公論社 p.69) 赤ん坊や幼児の中にある愚かさの故に、おとなは子どもを可愛がり、保護してやろうという氣を起すのだという考えは、随分むかしから指摘されていることが分

つて面白い。實際、幼児がおとなのような分別を備えていたら、おとなは幼児をかわいらしく思わないだろう。子どもにふれるときには、おとなも愚かなものゝ如くなるのができ、そのとき、何か本当の人間らしさを取りもどせるような氣がするのではないだろうか。世の中が知者ばかりになったら、全く窮屈で息がつけなくなってしまうだろう。また、戦争もたえないだろう。愚者の存在というのは、われわれの住む世の中にとって、實にたいせつなことなのだと思う。エラスムスは縦横に古人の言を引用してこのことを云う。「賢さが少なければ少いほど、それにつれていよいよ幸いとなる」(ソポクレス)「ただ痴愚のみが、のがれ去る青春をひきとめ、いまわしい老衰を退却せしめる」(格言)「知識が加われれば苦しみも増し、知恵を増す者は怒りを増す」(ソロモン)「神は世間の目に愚かなる者を選び」(パウロ)等々。(津守)

## 幼児の教育 第七十九巻 第四号

四月号 © 定価二五〇円

昭和五十五年 三月二十五日 印刷  
昭和五十五年 四月 一日 発行

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行人

112 東京都文京区大塚二ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

108 東京都港区三田五ノ二二ノ一

印刷所 図書印刷株式会社

101 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京九一一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします